

ガネフォの思い出

古川 康之 (75 歳)
(中央大学出身)

早いもので、あれから50年。半世紀前の事で、ガネフォの思い出として、まっ先に頭に浮かぶのは、中大卒が4名参加して、菅久先輩、田中君、浜野君の3名が、すでに逝ってしまった事です。

田中信義 浜野武人 両君は大学の1年後輩で常に行動を共にし、練習、合宿、試合と苦しさ、楽しさ、時には悔しさを共に分ちあった仲でした。特に私が主将の時、二人は私をよくサポートしてくれました。チームで常に存在感のある頼りがいのある後輩でした。田中君は40代の若さで、浜野君は定年退職後まもなく帰らぬ人となりました。残念でなりません。そして菅久先輩も3年前に逝かれました。特に、菅久先輩は、私にとって中学、高校、大学そして社会に出てからも、仕事と一緒に時期があり、公私共にお世話になった先輩でありました。我が人生の恩師です。最後まで少年の心と情熱を持続け、何事にも熱い心の先輩でした。この50周年の佳節を共に語り合えないのが、本当に、本当に、残念でなりません。

あらためて、お三方のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

この度、村上(本郷)さんから「ガネフォの思い出」をとのご指示があり、今まで頭の中で断片的にうろ覚えになっている事を、私なりに当時の資料を参考に、日記風にまとめました。

1963年(昭和38年)

- * 10月初旬 インドネシア共和国よりガネフォ大会への参加要請あり

詳細は菅久先輩の遺稿の通りです。

- * 10月中旬、ガネフォ派遣選手12名を決定した
内田啓一、村川吉高、房野康滋、酒井哲也(以上日大出)
菅久尚武、古川康之、田中信義、浜野武人(以上中大出)
桑原和司、村上(本郷)順三(以上成城大出)
吉田 稔、中山光次(以上法大出)

- * 10月下旬、伊豆河津 峰温泉プールにて合宿練習(5日間)
当時は都内に室内プールが無い為、温泉プールで合宿練習を行った。
チームワークと強い絆を固める。

- * 11月2日 第一陣（水球、フェンシング）羽田出発 20時間のフライト

ベトナム、サイゴン空港がクーデターにより閉鎖で給油出来ず、やむなくフィリピン、マニラ空港にて給油 目的地に着かない内から、何かキナ臭いにおいを感じた。

- * 11月3日真夜中のジャカルタ空港に到着

タラップから敷かれた赤い絨毯を歩き、首に歓迎のレイを掛けられた。そして、空港を出ると、そこには、深夜にもかかわらず、数千人の民衆の歓声と熱気が渦巻いていた。

- * 11月4日 選手村 早朝からコーランの大音響

深夜に到着し、すぐ選手村に入り、翌日、早朝からイスラム教のコーランの大音響で起こされた。これが、毎朝の事で、こんな環境の所が選手村であっていいのか！！？

部屋にはヤモリが数匹、天井や壁を這い回っていた。蚊帳は吊ってあるが、慣れない我々には不気味な環境であった。

- * 在インドネシア日本大使館での日本選手団歓迎のおむすびパーティー

古内大使が涙しながら、我々のガネフォ参加を喜んで歌まで唄って歓迎して下さった。あの、おにぎりの味が忘れられない。大会開催中に3度もパーティーを開いて頂いた。

- * 現地での練習

日本では寒くて練習が出来ないので、一足早く現地入りしたが、練習場所や時間の変更が多く練習スケジュールとコンディショニングに苦勞した。

田中信義君が体調を崩し高熱の為、7日間選手村の病院に入院。

- * 11月10日開会式——日本選手団、万雷の拍手の中、堂々の入場行進

11万8000人の大観衆(収容定員11万人)でハチきれそうだった。参加国51ヶ国、2700名、の大打進であった。

日本は9種目96名の参加（水球、柔道、フェンシング、ヨット、陸上、卓球、バドミントン、レスリング、ボクシング）

競技場正門前は戦車がガードし、スカルノ大統領は安全のために、宮殿からヘリコプターで直接会場入りした。

大会への総動員は徹底していて、軍隊も警察も動員し、会期中、学校は全部休校にして労力奉仕した。

* 水泳競技開会前夜祭での「支那の夜」事件

詳細は菅久先輩の遺稿の通りです。

* 11月18日 水球決勝 対インドネシア戦に0対2で惜敗
2位に終わる

水球が終わったので、急遽、競泳400m自由形に古川を、100m自由形に酒井をエントリー。古川は善戦したが決勝進出ならず、酒井は見事決勝進出し6位に入賞した。

* 11月21日 閉会式

日本のメダル獲得数は、参加国51ヶ国中 第6位であった。(金3、銀9、銅9)

* 11月22日 ケネディ アメリカ大統領暗殺のニュース

選手村や街中に半旗が掲げられていた。ここ1ヶ月の間に南ベトナムのクーデターそしてケネディの暗殺、世界が何か良くない方に向かって動いている。

情報の全く入らない選手村で、不安で暗い気持になった。

* 大会終了後、帰国までジャカルタ市内及び近郊を見学観光

古川がトランジスターラジオで鱧革をゲット

携帯ラジオを聴きながらお土産を物色していると、店主が寄ってきて、ぜひ商品と交換して欲しいと懇願され、ソニー社製のトランジスターラジオと鱧1匹分のなめし革と交換した(ラジオは当時3~4千円、鱧革は帰国して調べると15~20万円)

(驚きやら嬉しいやら、母にあげたら大喜びで、すぐにハンドバックにしてしまった。)

* 滞在中の浜野武人君の現地娘さんとの純愛エピソード

* 11月29日ジャカルタ出発 帰途香港にて1泊し、市内観光

* 11月30日 羽田到着 現地解散

大きな項目は以上になりますが、半世紀前の事で、詳細はどうしても思い出せません。自分にとって初めての外国で、青春時代の、大きな大きな1ページになったことは確かです。出発前からいろいろ想像はしていましたが、現地に行ってみると、それ以上の新しい発見と驚きの連続でした。毎朝のコーランの大音響、時間は守らない、街の人々の貧しい暮らし、密集した掘っ立て小屋、インフラの遅れ、治安の悪さ、政治の不安定等々、外国に来て改めて日本の良さを再認識しました。日本は戦後18年、翌年に東京オリンピックを開催出来るまでに復興していました。それに比べ、インドネシアのこの現状、総てにおいてまだまだ、まさに新興国であったのです。なぜ? これらの事が強く

印象に残っていて、今でも当時を思うと、それらの事が、すぐ目に浮かびます。

政治、文化、経済、物事の価値観、生活習慣の違いが、これだけの格差になったのでしょうか？ 当時、自分は社会に出てまだ2年目、総てに未熟で深く理解できる知識や能力はありませんが、直感的に、ここで見聞きした体験は、きっと何かの役に立つ時がある。と自分の将来に少し自信が持てたことを覚えています。

翌年、第18回オリンピックがアジアで初めて東京で開催されました。参加国は93ヶ国に及びました。(前回の第17回ローマ大会は83ヶ国)メディアは、東京大会の大成功を伝えました。

我々の行動が、いささかでも貢献出来た事を誇りに思っております。

今、50年経って振り返ると、自分の仕事や生活の中で、あの時の経験が役に立ったり励みになったりして、今日まで生きて来たと、秘かに自分だけの誇りにしております。

素晴らしいガネフォ水球のチームメイトに恵まれ、感謝しております。

本当に、ありがとうございました。御礼申し上げます。

今の心境を、詩にしました。

水球の 絆育み 半世紀

我らガネフォの 語り部となる



日本選手団の入場行進 一番前が私(古川)